

発達 PB114

児童の動機づけ志向性と目標設定行動

中山 勸次郎

(上越教育大学)

中山(1983, 84, 92他)は、児童の動機づけ志向性を、達成課題に対する内発的志向性(課題志向性)と社会的・対人的側面への志向性(社会志向性)の2つによって規定し、彼らの達成行動を検討してきた。本研究では、自由に課題を遂行できる場面と、外的評価が強調されている場面において、様々な動機づけ志向性を持つ児童がどのような目標設定を行うかが分析された。

外的強制がなく自由に課題に取り組める状況では、その課題に対する各児童の内発的動機づけを反映した多様な目標設定が観察されると考えられる。しかし外的評価が強調される場面では、達成へと圧力がかかるため、内発的動機づけが低減し、こうした個人差は生じにくくなるであろう(Harter, 1978; 橋口, 1982)。また社会志向性の高い児童は、かえって評価場面に強く動機づけられるかも知れない。

本研究では、課題への動機づけの高さが、自己の能力に見合った最適挑戦レベルの目標設定に反映されると仮定し、目標設定行動という側面から、評価・非評価場面での児童の動機づけの違いが分析された。

方 法

被験児と分類 小学5年生 183名に社会志向性・課題志向性測定尺度(中山, 1986)を実施し、両志向性の相対的高さに応じて児童を4群に分類した。内訳は次の通り。 HH群(両志向性とも高い)26名
HL群(社会志向性が優位)24名
LH群(課題志向性が優位)28名
LL群(両志向性とも低い)35名

課題と手続 樋口他(1986)を参考に、数字-符号置換課題を用いた実験場面が設定された。導入試行の後、「課題に慣れるまでしばらく練習してもらいます」との指示によって練習課題3試行を行い、続いて「本番のテスト」である旨を強調したテスト課題3試行、各1分間を行った。各試行の直前に、前回の解答数を自己評価させ、それを参考に、「次は何題くらいやれそうだと思うか」という指示によって、目標値の記入を求めた。なお、練習・テスト試行が各3試行ずつであることは、あらかじめ知らされていない。

結 果

各児童ごとに(次回の目標-前回の正答数)の式で目標差得点を計算し、練習場面・テスト場面ごとの平

均得点を用いて、群×場面×性別の分散分析を行った。

その結果、練習場面では、特にHL群が実際の成績よりかなり高い目標を設定しており、一方HH・LH群は、成績とほぼ一致したレベルに目標をおいていた。対比較では、これらの群間の差が有意だった。これに対してテスト場面では、各群の目標レベルの差が少なくなり、有意差も見られなかった。また、HL群は練習場面よりテスト場面で目標を低め、LH群は逆に目標を高めていた。

正答数と目標値との相関係数を見ると、練習場面ではHH群($r=.641$)・LH群($.559$)での相関が高く、テスト場面では4群とも相関が高いが、中ではLH群での相関が低かった($.443$)。

考 察

外的評価のない場面では、予測通り課題志向性の高い2群が、前回の成績に応じて慎重で現実的なレベルに目標を設定していた。一方HL群は、極端に困難な目標を設定する傾向にあり、この群の評価懸念の高さを考えれば、こうした目標設定は、この群の失敗可能性を高める可能性があるだろう。

テスト場面では全般に自己の成績を多少上回るレベルへの目標値の変化が見られ、成績との相関の高さも考えると、外的評価のための手段的活動としての目標設定へと変化したことが推測される。この傾向はHL群に顕著であり、評価場面への動機づけの高さが確認された。逆にLH群では、評価場面での動機づけの低下が示唆される。

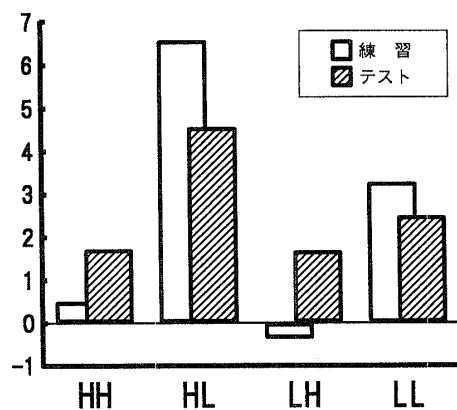


図1 両場面における各群の目標差